

かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第44号（令和4年8月）

あゆむ「今日は、何の木を見に行くのかな？」
ミドリ「杉の木だって。」
あゆむ「杉って山にたくさんあるけど・・・。」
ミドリ「天然記念物になるくらいだから、何かすごい木なのよね、きっと。」
ふみお「古いとか大きいとかなどの特徴があるはずだよ。」
あゆむ「ところで、それはどこなの？」
ふみお「宮脇の八幡様だ。」
ミドリ「あ、国道を越えたあのお宮ね！」
文じい「さあ、あそこじゃが・・・。」
ミドリ「すばらしい“お社”ね。」
あゆむ「いろんな木があるけど、どれかな？」
ミドリ「伐られた木の切り株があるけど・・・？」
ふみお「これはけやきだ。きっと大きくなりすぎて、危ないので伐ったのだろうね。」
あゆむ「そうとう大きかったみたいだね。」
ミドリ「そうね。ところで杉の木は？」
文じい「実は、あれなんじゃ。」
ミドリ「えっ！杉の木も切り株だけだわ！」
ふみお「標柱が立っている。確かに、“上市市指定文化財 宮脇八幡宮の一本杉”とある。でも、どうしたわけ？」
文じい「実は、5年前に台風による強風で倒れた。ほれ、これがその時の写真じゃ。」
あゆむ「うおっ！これは大変だったな。」



ミドリ「かわいそうだわ・・・。それで、倒れる前の状態はどんなだったのかしら？」

菖蒲の大杉

しょうぶ おおすぎ

正八幡宮の一本杉

しょうはちまんぐう いっぽんすぎ

文じい「ふむ、その頃の写真も持ってきた。」
ふみお「大きくて立派な杉だったんだね！」



ミドリ「大きさと樹齡とかはどうだったのかしら？」

文じい「記録によると、胸高の幹周り、つまり、太さは、4.52m。高さは、約25mだったそうじゃ。そして、樹齡はおよそ300年を超えていたそうじゃ。」

あゆむ「すごいね。300年という、この前の“いちいの木”と同じくらいだな。」

ふみお「ところで、胸高というと人間の胸のあたりの高さということだよな。どれくらいをいうのかな。」

文じい「およそ1.2mの高さじゃ。」

ミドリ「今、この切り株の大きさを見てもすごいものね。」

文じい「しかし、だいぶ衰えてきていたこの杉を、宮司の八幡様も心配しておられたからのう。」

ミドリ「そうね。とっても残念なことだったけど、ひとつの寿命ということで、感謝の気持ちで手を合わせるしかないわね。」

あゆむ「さあ、次、もう一か所は、どこ？」

ふみお「菖蒲の大杉だって。」

ミドリ「やっぱりすごく大きいね、きっと。」

ふみお「前に行ったことがあるけど、確かその先に“菖蒲ダム”というのがあったな。」

ミドリ「あ、ここだわ。」

ふみお「イノシシなどから守るためのフェンスがあるけど、説明に従って開けて入ろう。」

ミドリ「あら、“菖蒲の大杉”という案内板と石柱が右に立っている。」

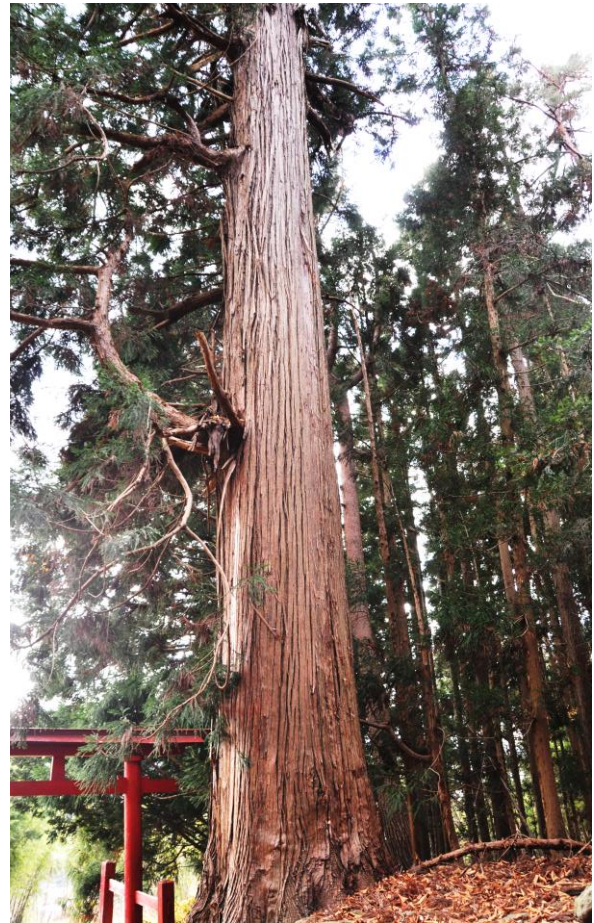
ふみお「林の中に鳥居だ。その先に神社。稲荷神社だね。」

あゆむ「その前の大きな木がそうかな。」



ふみお「そのようだね。あ、裏側から見るとよくわかる。」

ミドリ「あら、そうね。すごいわ。大きい！」



文じい「胸高の幹周り4.5m、高さ約28m、推定樹齡が200年の御神木ということじゃ。」

あゆむ「八幡様のと変わらないくらい大きいな。こっちは、元気そうだな。」

文じい「“裏スギ型”の仲間になる天然性のスギじゃ。」

ふみお「裏スギというのは？」

文じい「太平洋側のスギを表スギ。日本海側のスギは裏スギと違って区別している。裏スギは、雪や寒さに強い。」

ミドリ「そうなのね。それにしても、わたし、木が寿命までしっかり生きていることを、今回でさらに感じたわ。」

ふみお「本当だね。指定の樹木だけじゃなく、他の木々も見守りながら、一緒に生きていきたいね。」